

産業
情報

いわて

Industry
Information
Iwate

2021.10.11

VOL. 213

[公財]いわて産業振興センター広報誌

特集／キラリ輝く★いわての企業

株式会社東光舎 岩手工場

職人の技の継承・向上に取り組み

最高品質の理美容用ハサミを世界へ

各部事業紹介／6・7

「情報関連専門展示会等出展費用助成事業」募集のお知らせ／8

ILC current topics／8



ヤスリの高速ベルトを使って表面の研磨作業が行われている一角



輝きを出すため、遠心バレル研磨機を使って磨く。研磨材はクルミの殻

職人の技の継承・向上に取り組み 最高品質の理美容用ハサミを世界へ

岩手町／株式会社東光舎 岩手工場

チャレンジ精神で事業を拡大

理美容用ハサミやペット用ハサミを開発製造・販売する東光舎(本社・東京)は、平成29年に創業100周年を迎えた。初代は医療用剪刀で起業し、数年後に理美容用ハサミの製造販売を開始。その後2代目は海外へと販売網を広げ、3代目はペット部門に参入するなど、代々新しいことに挑戦して事業を拡大してきた。

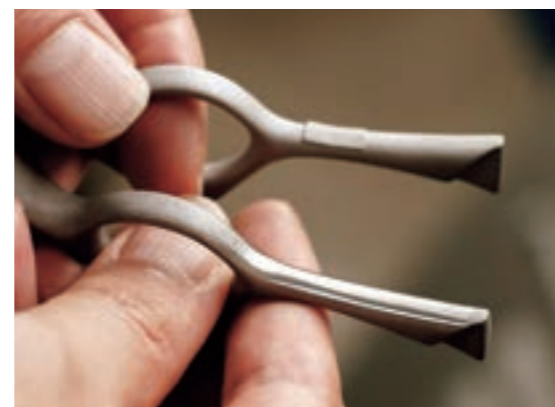
製造拠点である岩手町の岩手工場は、理美容ハサミ専用の工場としては国内屈指の規模。最新設備を

備え、ペット用と合わせて月2000～3000丁を市場に送り出している。

主力は、昭和50年に「JOEWELL」のブランド名で販売した美容用ハサミで、国内はもちろん海外でも評価が高い。現在50カ国以上のプロに愛用され、世界的に活躍するスタイリストとのコラボレーション商品も少なくない。

このように「JOEWELL」も含め同社のハサミが長い間ユーザーに支持されてきた理由は、「品質の良さ」だ。品質は、切れ味、使い勝手、デザインなど様々な要素で決まるものだが、

「当社では『お客さまが頭の中でイメージしているスタイルを確実に再現できること』と定義しています」と4代目の井上研司社長は説明する。



研磨する前(上)と後(下)のハンドル部分

海外の展示会を「教育」の場に

その「品質」を担っているのが、職人の技能だ。同社では溶接、整形、熱処理、研磨、遠心バレル研磨、刃研ぎ・矯正、刻印といった工程でハサミを製造しており、そのほとんどを職人の手作業に頼る。そのため、職人が一人でも辞めると極端に生産性が下がってしまうという。

そこで3年前から技術継承や人材

育成の取り組みとして、「伝統芸能の技能継承」を研究する県内の大学と共同研究を行っている。同社では以前から、教えることが得意な熟練工が1対1で指導する「OJT」により人材育成を図っているが、これをシステム化・効率化するための共同研究なのだという。

また、職人の技術向上と同時にモチベーションアップにつなげているのが、海外の展示会への参加だ。コロ



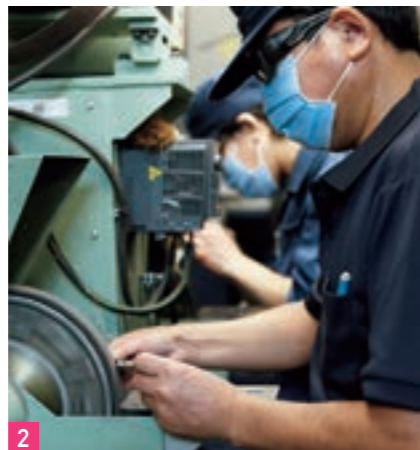
アームに刃を1枚ずつ取り付けて、研磨機にセットする。その後、2時間回転させて磨く仕組みだ

ナ禍以前は、毎年イギリスとロシアでの展示会に「研ぎ」の職人を参加させていた。

「会場では販売やデモンストレーションだけでなく、お客さまのためのメンテナンスを行います。限られた時間内で大量のハサミを研がなくてはいけないので職人たちにとっては大変なのですが、作業が終わるとお客さまから握手を求められるなど、とても感謝される。これは自分たちの仕事の価値や意義を認識できる貴重な体験で、教育の一環であると考えています」と井上社長は語る。



理美容用のカットシザーズ。世界各国のプロに愛用されている



世界で唯一、漆塗りのハサミを開発

このような技術の継承や向上に力を入れる一方、いわて産業振興センターの「希望応援ファンド」を活用した新商品開発にも積極的に取り組んでいる。中でも昨年の発売以来話題を集めているのが、県産漆を使った、世界で唯一の漆塗りのハサミだ。盛岡市の(株)浄法寺漆産業、コレットヘアとの共同開発で、一色のベタ塗りではなく複数色の柄を施しているのがポイント。定番柄4種のほか、オリジナル柄の注文にも対応しており、海外のユーザーを中心に販売数を伸ばしている。

さらに現在は、プラスチック製のハサミの試作に打ち込む。当初は災害医療用として想定していたが、コスト面で商品化が難しいことから、昨年、デザイナー向けのクラフト用にシフトチェンジ。金属部分の刃は研ぎや

交換が、それ以外の部分は熱リサイクルが可能で、SDGsにつながることも強みだ。

職人に生産性への意識づけを

歴代社長の血を受け継ぐ井上社長は、平成26年の社長就任以来、新しい取り組みにチャレンジしてきた。「職人の技能評価システムの構築」もその一つ。これは、日常の生産量が一定量に達したら技能試験の受験資格を与え、試験に合格したら賞与などで優遇するというもので、技能評価に「生産量に対する貢献度」を加えた点がポイントだ。生産量の計測には、いわて産業振興センターの「スマートものづくり補助金」を使って開発した「着工完工時間の収集システム」を利用。まだ試行の段階だが、最終的には職人の生産性への意識づけと、技能の「定量化・見える化」を目指している。

ハサミの品質を定量評価したい

平成31年4月、同社は国内のメーカー4社とともに組合「HSC」を設立した。理美容用ハサミの基礎的知識を統括するとともに、ハサミの品質を定量評価するシステムを構築し、日本製ハサミのブランド強化やユーザーの保護を目的としている。

ハサミの定量評価に関しては、前述の「スマートものづくり補助金」を活用し、井上社長自ら評価試験のための試験機を製作。試験機はハサミの切れ味を定量的に検査するもので、試験結果の一部は日本塑性加工学会のWeb講演会で発表している。

「今後も研究・発信を続け、最終的にはハサミの認証制度をつくりたい。これは職人の技能向上にもつながります」と井上社長。目指すは「より良いハサミづくり」だ。

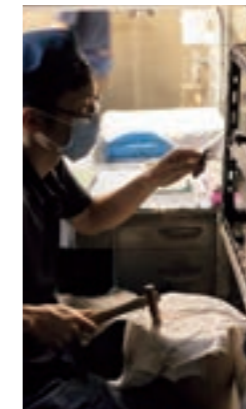
1 ハンドル部分と刃の部分を溶接 2 機械を使って溶接によるバリや汚れを取りながら、穴加工などの整形を行う 3 刃部分をたたいて、曲がりやたわみを調整する。光を当てて確認するため、暗い状態で作業を行う 4 出荷前の検査。スムーズに動くかどうかチェックする

技術ポイント



職人の技能

それぞれの工程が難しいので、同社では分業体制をとる。新入社員には最初に研磨を体験させ、ここで適性を見極めて配属させるという。配属後は、OJTや海外の展示会への派遣などで技術向上・人材育成を図っている。



商品開発力

「ハサミは基本的な形が決まっているだけに、他社製品との差別化をどう図っていくが重要」と話す岩手工場企画開発部係長の佐藤昭さん。商品開発の中心的役割を担う。プラスチック製のハサミは、東日本大震災直後に井上社長が、軽くて運びやすく使い捨てができる医療用ハサミとして思いついたという。また漆塗りのハサミは、着色ハサミの一種として、伝統素材で岩手の特産品である漆に着目したことが開発のきっかけ。写真は「キャラクター柄」と「若冲の鶏」。海外からの注文が多く、「派手な色調のほうが海外ユーザーの受けが大きい」という予想は見事に当たった。



企画開発部係長
佐藤 昭さん

代表メッセージ



代表取締役社長
井上 研司

>代表プロフィール

東京都出身。大学院を卒業後、大手鉄鋼メーカーに勤務していたが、2代目社長である父親の病気をきっかけに同社に入社。3代目社長の兄の闘病により、平成26年に社長に就任した。学生時代の研究テーマは「塑性加工」で、博士論文のテーマは「ハサミ加工」。

数年前、「赤瓦職人の減少により、火災に遭った首里城の再建が進まない」というニュース記事を読み、「ハサミ作り」に重ね合わせました。もし工場を閉鎖したら、当社のハサミ作りの技が失われてしまう。そのために、毎日の仕事以上の覚悟でこの技の継承に努めなければと思っています。また、もう一つ意識しているのが、県内企業や県産品とのコラボレーション。最終的にコスト面で商品化が難しい場合もありますが、少なくとも開発段階ではタッグを組みたいですね。

企業DATA

会社名 株式会社東光舎
代表者 井上 研司
業種 理美容用ハサミおよびペット用ハサミの開発・製造・販売
工場 岩手県岩手郡岩手町川口11-3
電話 0195-65-2225
沿革 大正6年／創業
大正10年／理美容用ハサミの製造販売を開始
昭和25年／東京都文京区に東光舎再建

昭和50年／美容用ハサミブランド「JOEWELL」販売
昭和53年／アメリカ・ロサンゼルス支社を開設
昭和56年／岩手県岩手町に岩手工場建設
平成元年／生産部門を岩手工場へ統合、東京工場閉鎖
平成14年／ペット事業部開設
平成29年／創業100周年

従業員 40名(2021年9月現在)
資本金 1,200万円
URL <https://www.jowell.co.jp/>



産業支援部

プロフェッショナル人材戦略拠点事業



人材紹介会社に対する説明会風景

県内企業の皆様の即戦力となる”プロフェッショナル人材”の採用を支援するため、有料人材紹介会社に対する求人内容の説明会を、盛岡・仙台で開催しております。また、コロナ感染状況が落ち着き次第、東京での開催も予定しております。

採用とは別に、リモートワークを前提とした「プロ人材への業務委託(副業・兼業)」のマッチング支援も行っております。

● お問い合わせ プロ人材担当 TEL: 019-631-3828

「経営課題解決IoT活用セミナー」の開催



県内企業の生産性向上及び競争力強化に資するIoT導入の取組を支援するため、標記セミナーを9月17日(金)に開催し、35名の方に参加いただきました。

前半はIoT導入における基本的な考え方やポイントを紹介し、後半はものづくり企業と食品加工企業の分科会に分かれて、それぞれの分野における導入事例等を紹介しました。

当センターでは、ICTやIoT技術の活用を検討する企業に対し、専門家派遣等による課題解決に向けた支援を行っておりますので、関心のある企業様は、お気軽にお問い合わせください。

● お問い合わせ 生産技術革新担当 TEL: 019-631-3824

食品関連産業活性化支援事業に係る専門家派遣の実施について



商品開発や販路開拓の課題を抱えている県内の食品事業者を対象に、商品のコンセプトづくりや販売戦略づくりの専門家を派遣し、助言・指導を行っております。

10月上旬までに6事業者様にご活用いただいております。冬に首都圏で開催される商談会に向けた、ブース設営やバイヤーへの訴求方法、独自価値の言語化などの指導を実施しました。

商品パッケージに関する助言やブラッシュアップ指導、EC販売導入助言等も可能ですので、関心のある事業者様はお気軽にご相談ください。相談内容に合った専門家と一緒に訪問いたします。

● お問い合わせ 地域産業・起業支援担当
TEL: 019-631-3823

ものづくり振興部

「第2回ILC技術セミナー」の開催について



8月25日(水)に、令和3年第2回ILC技術セミナーを開催しました(リモート形式により開催)。今回は「放射光の利活用」をコンセプトとし、はやぶさ2帰還試料の顕微有機物分析に携わる分子化学研究所極端紫外光研究施設UVSORの大東琢治先生を特別講師にお招きした他、岩手大学による放射光施設を活用した研究開発の取組みについてご紹介しました。

● お問い合わせ 産学連携室 TEL: 019-631-3825

「いわてDXセミナー」を開催



県内企業のDX促進を図るため、DXの必要性、先進地域の事例や実証企業の取組等を紹介するセミナーを7月28日(水)・8月27日(金)の2日間にわたり開催し、のべ154名の方に参加いただきました。また、年度末には事業成果報告会を開催予定です。

当センターでは、専門家によるオーダーメイド型勉強会の開催等、DX導入における課題解決に向けた支援を行っておりますので、お気軽にお問い合わせください。

● お問い合わせ 産学連携室 TEL: 019-631-3825

「4道県合同商談会2021」開催のお知らせ



製造業を対象とする「青森・秋田・岩手・北海道合同商談会」を令和4年2月10日(木)TRC東京流通センター(東京都大田区)にて開催いたします。関東地区を中心とした発注企業と4道県の受注企業による対面の商談会を予定しております。

詳細につきましては、いわて産業振興センターホームページをご覧ください。

● お問い合わせ ものづくり振興部取引支援・産業集積担当
TEL: 019-631-3822

「いわてオンライン商談会」開催のお知らせ



新規取引先開拓のきっかけづくりや新たなビジネスチャンスの創出を目的として、令和3年12月8日(水)～10日(金)の3日間、製造業を対象に「いわてオンライン商談会」を開催いたします。

詳細につきましては、いわて産業振興センターホームページをご覧ください。

● お問い合わせ ものづくり振興部取引支援・産業集積担当
TEL: 019-631-3822

「情報関連専門展示会等出展費用助成事業」募集のお知らせ

ソフトウェア関連の製品・技術等をPRするために全国的な専門展示会への出展を希望する県内ソフトウェア関連中小企業者に対し、出展経費の一部を助成する標記事業の申請事業者を募集しています。

販路開拓の一助とするため、積極的にご活用されますようご案内いたします。



助成対象者	岩手県内に本社又は拠点(営業拠点を除く)を有しているソフトウェア関連中小企業者
助成対象経費	出展料、小間装飾費、派遣説明員の旅費・宿泊費
助成金額	助成対象経費の合計の半額または150,000円のうち低い額
募集期限	令和3年11月30日(火)

申込方法等

当センターHPより申請書をダウンロードいただき、必要事項を記載し、必要書類を添付のうえ担当までご提出ください。その他、本事業の詳細につきましてもHPでご確認ください。



募集要項はこちら

事務局

生産技術革新担当
TEL : 019-631-3824

ILC current topics



なぜ北上山地がILC建設候補地に最適とされたのか

国際リニアコライダー (ILC) は、国際協力によって設計開発が推進されている次世代の直線型加速器です。その建設候補地は研究者によって北上山地が最適とされています。

ILCは全長数十kmの直線状の地下トンネル内で電子と陽電子を光速に近い速度まで加速させ正面衝突させます。電子と陽電子を精密に衝突させる必要があるため、人工振動が少なく活断層がない硬い安定岩盤にトンネルを建設できることが求められます。

世界の研究者が協力して作成し、2013年に発表されたILC技術設計書では日米欧それぞれの施設設計が併記されていました。

日本国内の候補地は、2000年頃には13箇所が挙げられていましたが、2010年に北上山地と九州の背振山地に絞られ、2013年8月に国内の研究者から構成されるILC立地評価会議が、技術的観点および社会環境の観点から「ILCの国内候補地として、北上サイトを最適と評価する」との結論を出しています。

岩手県 ILC 推進協議会からのお知らせ

奥州市から一関市にかけての北上山地の地下にはとても頑丈な「花崗岩」の岩盤が広範囲にわたって分布しており、北上山地はILCを建設するうえでとても良い条件が揃っている場所とされています。実際、国立天文台の「江刺地球潮汐観測所」が北上山地の地下にありますが、この施設の装置は東日本大震災の地震による影響を全く受けませんでした。

2017年になり、日本の高エネルギー物理学研究者会 (JAHEP) がヒッグスファクトリーとして早期のILC建設を提案し、リニアコライダー国際推進委員会 (LCB) も強く支持しました。これを受けて国際将来加速器委員会 (ICFA) は「LCBの結論を支持し、日本のイニシアチブによる国際プロジェクトとして、時宜を得て実現することを強く奨励する」と声明を発表しました。

こうした取組を経て、国際的なILC設計検討は北上山地を前提として進められており、本年6月に公表された「ILC準備研究所提案書」においても北上山地を建設候補地として地質調査の例などが示されています。

